20170507

人の評価(ヨハネ1:9-13)

いま1部礼拝では、私たちにとってとても自然で当たり前だと思っていたものが、実は聖書によりますと「違いますよ。そうではないのだよ」というお話をしています。ですから、真剣に聞かないと、あまりにも当たり前な事だったので、「違うよ」という話が入ってこないし、自分の内側で成り立たないようになるかもしれません。ある意味、心の内側での革命であるし改革だとも言えるものだと思います。神様の御言葉によって皆さんの内側に当たり前だったものが崩れ壊れて、神の御言葉が刻み込まれる祝福、そのような神の答えがあることを祈りたいと思います。

特にとても重大な根本的なテーマを取り上げて、今までこういうことが幸せだと、皆がそう思っているし、私も生まれた時からずっとそういうものだと何の疑いもせずに思っていたそれが実は幸せではなかった。問題について、当たり前にこれだ、あれだと思っていたのが、実はそうではなかった。その御言葉に対して、皆さんはいのちある方なので反応することができる方なのです。あー、そうだったのか。今まで騙されていたのだね。無知だったのだね。勘違いしていたのだね。というような反応、波動のようなものを皆さんの心に送ることが神様が望まれることです。

その中その中で今日は、人をのように評価するのかに対して、今現在も世の中で、そして、皆さんもクリスチャンもああだ、こうだと思っていたものが、聖書によりますと神様の評価を正しく理解したときに全く違ったということを悟れるようになることを祈りたいと思います。人をどのように評価するということは、非常に大切です。いろいろな理由があるでしょうけれども、その中で特に大きな理由がこういうものだそうです。拒食症、過食症という精神的な疾患がありますが、それは自分自身がとても惨めなものだという評価を自分の内側で持っていることが、そのように現れることだそうです。自分は食べる価値のない存在なのだと思ったときに、食べ物を拒否するようになるのです。もちろんスタートはダイエットだっただとかいろいろありますが、そのダイエットを始めるのも、ただ健康のためにではなくて、自分が惨めだという根本的な考えがあるのでそこをどうにかするために始めるのがダイエットなのです。それが結局は拒食症になります。反対に、もう本当は治らないのだからと、自分は人間以下の豚のような存在なのでもう食べるしかないといっぱい吐きながら食べる、それが過食症です。どちらでも自己評価がものすごく暗くて否定的な場合に、そのような症状が現れるそうです。多分そういう人々の話を聞いてみると、いつなのか、またどのようなきっかけだったのかはそれぞれ違うでしょうけれども、自分が拒否され否定された経験を持っています。それが親からなのか、友達からなのか、社会からなのか、学校の教師なのか、あるいは好きな人からなのかはわかりませんけれども、否定されてしまった経験が否定的な自己評価につながり、そして、それが被害者意識を持つようになり、それがエスカレートしていきますと被害妄想に発展していくようになるそうです。それほど自己評価というものは非常に大切なのです。逆に、ものすごいビジョンをもって野望に燃える人もいます。そのような人の場合、否定されたことに対しての反動的な反応の場合もあるのですが、ほとんどの人は、先程のお話とは反対に、何かで誰かに認められた経験があるのです。認められたので、肯定的に評価されたことをバネにしてビジョンを持ち、この世界を変えよう、この社会をどうにかしようといい思いなのでしょうけれども、肯定的な自己評価によってそのように走っていくことにもなるそうです。否定されるから否定的な評価になり、評価されたから肯定的な評価になる、それが一般的な理屈です。でも、本当にそのような評価でよろしいのでしょうか。

今も世の中では、人間に対しての評価は大体このような基準です。何かの有無によって、あるいは優劣によって人を評価します。その一番のものが何かというと、小さい頃に家族、あるいは親からの愛情があったのかなかったのかによって評価するわけです。あるいは優劣などによって周りも評価し、自分もそのように評価してしまいます。ほぼ避けることができないでしょう。あるいは経済的な力があるかないか、また優れているのか劣っているのかによって人を評価するでしょう。それは当たり前ではないでしょうか。その人が持っている能力、才能や実力、成績、様々な内容があると思いますが、そういうものがあるかないか、上なのか下なのかによって、就職の時でも学校に入る時でも、あるいは教師が学生を見るときでも、親が自分の子供を評価するときでも、そのような内容の有無によって評価します。ときには体力的に優れている人と病弱な人など、いろいろな差があると思いますが、そういうことによって評価したりします。女性でも男性でも同じなのですが、「どのような人がタイプですか」、「どういう人が好きですか」と聞くと、必ず100%決まっている答えがあります。優しい人。どんなに辛い経験をしたのか分かりませんが、優しい人と言います。昔は女性の方が多かったのですが、今は男性も皆同じ答えです。だから、性格的に優しい人、面倒見の良い人と、その反対に迷惑ばかりかける人などを見ると、どちらを評価しますか。こちらの人が良い人間、こちらの人が悪い人間と評価せざるを得ないでしょう。それが普通に当たり前の評価です。だから、親も、子供ができるだけ才能を持って成績が上のほうに行くことを望んで必死に頑張っています。それが評価がされるわけですから。ときには状況によって評価の基準が左右される場合もあります。みなと一緒に手を組んで協力しあってという状況と孤立している寂しい状況などによって評価があります。自分一人しかわからない、強調することが全くできない人間、そういう人は指をさされるわけです。いじめられるわけです。そして、かやの外に出されて追い出されるようになります。そのように評価するわけですから。また、周辺の助けがある状況と、助けるが全くない状況があります。それがまた評価につながるようになります。危機的な状況に置かれている場合と、安定している状況に置かれている場合など、いろいろな差があります。そういうことによって良い人生、あるいは悪い人生、幸せな人生、不幸な人生というように評価をするのではないでしょうか。

それから、もう一つ申し上げると、大体、外見によって評価します。外見というのはいろいろあります。肌色が違うことによって、どちらが上なのか下なのかというような評価もいまだにずっと続いています。民族がどの民族なのか、同じ民族の人はかばって、そうではない民族はつぶしてというような評価もあります。また、どんな宗教を持っているのか、同じ宗教なのか違うのかによっても評価したりします。実際、外見が本当に顔がブスなのかハンサムなのか美人なのかなどによって、また評価したりします。その一番代表的なケースが、ユダヤ人です。ユダヤ人だということと、割礼があるものとないものとの評価は天と地の違いです。そのような基準によって評価したりもします。今回、修養会に行った時に、中学生、また小学校高学年の子どもとお話しする機会が少しありました。十分にはお話しできなかったのですが、聞きました。嘘をつく人と嘘をつかない人とどちらが評価されるでしょうかと。どうでしょうか。極端な話です。当たり前に100%、100人に聞けば100人全員が「嘘をつかない人がいい人で、嘘をつく人は悪い人です」と評価するでしょう。違いますか。嘘をついてもよいと言う話ではありません。ただなぜ嘘をつかないのか。なぜ嘘をつかないことが評価されるのか。それが聖書にある評価なのかということをクリスチャンの私たちは吟味しなければいけません。今申し上げているのは極端な例です。問題は、それはもう変えられません。世の中はそのような構図があり、それが世の流れというものなのです。結局は、神様を離れたまま、神様がいらっしゃらないが故に生まれてきた価値観であり基準なのです。それが必要なのかどうかは別にしておいて。けれども、信者、クリスチャンでも、同じ評価の基準をもって、当たり前だと思ってその評価に左右される傾向があります。しかし、クリスチャンは違います。今まではそうであったとしても、神様はそのように評価するのかどうか吟味しなければいけません。今申し上げました人に対する当たり前の評価というものは、神様ということが一言も入らないで排除されて成り立っているものだということを皆さんはぜひ覚えておいてください。道徳や倫理というものもよくよく考えてみると、神様がいらっしゃらないが故に神様抜きにして維持するために人が作り上げたものではないでしょうか。それは、いらないとか無視という意味ではありません。必要なものなのです。でも、それが正解だとは言うことができないものです。なぜこれがこんなに大切なのか、この部分に対して内側から皆さんが納得して、今まで当たり前だったものが抜けて、改革が起こらないと神様の御言葉、メッセージが実際に聞こえて来ません。どんなに10年、20年聞いていても。神なしで作り上げられた、つまり偽物の神が、内側にそのままの状態で、神様のメッセージを聞くというのは無理でしょう。矛盾してしまうようになります。クリスチャンの方々もなかなかそれに気がついていないのではないかと思います。

ですから、どんなに当たり前で、世の中を維持するために必要な内容であるにしても、クリスチャンは問いかけなければいけません。神様がそのように評価されるのか。神様の評価はどうなんだろうかと。それがクリスチャンでしょう。神様は人のことをどのように評価していらっしゃるのでしょうか。それが聖書の話であり、特に、今日のヨハネの福音書1章を見ると、それが明らかに示されています。まずヨハネの福音書1章のふたを開けるその瞬間、この世の中は暗闇に覆われているというのが大前提なのです。つまり、言葉を変えますと、神様の評価を理解するためには、人間、この世の中が、実は絶望的だということを大前提にしなければいけません。それが闇の中に覆われているということなのです。昔からそれは示されていました。イザヤ60章2節を見ると、諸国の民は闇に追われているとあります。特別な国、特別な悪ふざけな人間ではなくて、犯罪者や悪霊に取りつかれているものだけではなくて、嘘をつくものだけではなくて、諸国の民は闇に追われているとあります。今日のヨハネの福音書1章5節を見ても、光は闇の中に輝いているとあります。これは聖書の他には教えていません。まず、これを大前提にしなければいけません。それをパウロはこのようにいました。ローマの手紙3章10節、義人はいない。ひとりもいない。嘘をつかない人間でも人に迷惑をかけずに、社会のために命を燃やして貢献する人間でも、犯罪者でも、すべての人は罪を犯したのでみな一緒なのです。これがまず人間に対しての評価のために、私たちが正しく覚えていなければならない内容です。義人はいない。ひとりもいない。ローマ3章23節には、すべての人がとあります。様々な基準によっていろいろな評価があるでしょう。その評価の右側、左側、上下関係なく、すべての人が罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず。前にもお話ししたように、劇やミュージカルを見てみると、1幕から2幕に変わるときに電気を消します。電気を消すと真っ暗になって、今まで見えてきたものが何も見えなくなります。それを闇というわけです。暗くなるまでは、電気を消すまでは、この人の顔が美人で、この人がブスで、背の高い人間、がっちりとした人間、痩せている人間、ここに扇風機があり、ここに冷蔵庫がありテレビが二台あって、旧型のテレビがあったり新型の紙みたいなテレビがあったり、いろいろ違います。電気を消して真っ暗になった時に、暗闇にいっぺんに全部閉じ込められて一緒になります。何が何だかその差が全部なくなります。わかりますか。すべての人が罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず。それがどういうことなのか。自分の罪と罪過の中に死んでいたものであって、生まれながら神の御怒りを受けるべき子らとして生まれる。誰がでしょうか。嘘をつかない人間、嘘をつく人間、両方一緒にです。成績が上の人間、下の人間、警察署と犯罪者、一緒に全部ひとくくりで。それが聖書の人間に対しての理解です。

そして、皆がそれぞれの道を歩んでいるかのように見えていても、エペソ2章2節にあるように、空中の権威を持つ悪魔、サタンに従って、世の流れに従って、世の流れに流されるしかありません。ひとりも例外はありません。一生です。つまり、神様の人に対しての評価を理解するためには、まず、人間がどういう存在なのか知らなければいけません。一言で申し上げますと、恵み、憐れみが絶対に必要な、神様の救いが必要な存在なのです。つまり、光が求められる存在です。それをまず理解しなければいけません。そして、神様が人を憐れんでくださいました。神様は、私たちが当たり前に評価するかのように、いい人、悪い人、幸せな人間、不幸な人間という評価をしません。すべては絶望的な生まれながら神の御怒りを受けるべき闇にとらわれている人間なので、そのような評価などせずに、救いのために光を与えられました。その光としてこられた方がイエス・キリストなのです。この世に来られました。ヨハネ1章4節、この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。9節、すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。イエス・キリストこそが、その光で、ひとりの例外もなくすべての人間は一緒なのです。滅びるに値するものなのです。神の憐れみの他には希望がまったくない、そのような存在なのです。この光として来られたイエス・キリストが、絶望的な人間、罪にとらわれている人々を、きれいにきよめられることになりました。ヘブル10章12節から14節を見てみてください。イエス・キリストがご自分をささげることによって永遠にきよい者にされたとあります。光として来られて、光の仕事をなさったわけです。Ⅰヨハネ3章8節、神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。これが光なのです。発展することが光ではなくて、人工知能が発展することが光ではなくて、医療の発展が光ではなくて、イエス・キリスト、悪魔のしわざを打ちこわして、私たちの絶望的な罪と滅びを永遠に全うされるそういう方が光なのです。その光が来られました。そして、そのイエス・キリストが十字架で死なれるときに、ルカ23章45節を見ると、人間と神様を隔てていたカーテンが上から下に真っ二つに破れて、人間が神様に行くことができる生きた新しい道が開かれるようになりました。これが光なのです。神様に会うことができました。この光の仕事のために、イエス・キリストは十字架の上ですべてを完了したとおっしゃいました。光の仕事が、闇の中で輝いて、闇のすべてを打ち破って、人々をそこから引き上げることができる仕事を全部完了したわけです。そしてイエス様がおっしゃっています。わたしは道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。このイエス・キリストが、おっしゃいました。闇の中に苦しんでいる、勘違いの中で間違っている評価によって右往左往している人間に向かって、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」。光が世に来られて、光としての仕事を全うされて招いていらっしゃるので、残るのはひとつしかありません。ローマの手紙10章13節、今までの評価は全部崩れて、だれでもイエスの御名を呼ぶものは救われる。ガラテヤ3章28節には、ユユダヤ人もギリシャ人も、どれも自由人も、男も女も関係ない。今までの人間の評価、世の中で見聞きしていた評価がいっぺんに全部崩れ消え去っていくようになります。だれでも、世に来られたイエス・キリストを信じるものは神様と一緒にあり、すべての罪がきよめられ、悪魔のしわざから解放されます。永遠のいのちを持つ、新しい命を持つ祝福のものに変えられるようになるわけです。闇の世界から光へと導き入れられるようになります。イエス・キリストを信じることによって。

つまり、神様の評価は、私たちが当たり前だと思っていた、今も世の中ではその評価が当たり前に横行していますが、神様の評価はちがいます。イエス・キリストを信じるか信じないかによって人を評価します。つまり、闇の中にそのまま入るのか、光の中に今移っているのかによって評価します。今日の聖書の13節を見ると、「血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、民によって生まれたのである」とあります。神によって生まれたのか、人の欲求によって生まれたままなのかによって人を評価されるわけです。これが神様の評価であり、聖書の評価です。光が世に来られました。けれども、10節、11節を見ると、世はこの方を知らなかった。ご自分の国に来られたのに、世はこの方を知らなかった。ご自分の国に来られたのに、その自分の民は受け入れなかった。つまりイエス・キリストが来られたのに、光が世に今来たのに、暗やみを照らして輝いているのに受け入れない、イエス様を信じない人がほとんどなのです。その中で、「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」。つまり、受け入れるか受け入れないか、信じるか信じないか、拒否するか受け入れるかによって、人は分けられるようになるものなのです。これが神様の評価です。ローマの手紙3章23節を見ていても、すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができずか、24節を見ると、しかし、キリストイエスの家にある恵によって信じるものは時と認められます。どちらかなのです。ローマ8章15節、もはや奴隷としての霊を受けたのではなくて、子としてくださる霊を受けたのです。つまり、神様の人間に対する評価は、奴隷としての悪魔の霊を受けているものなのか、神の子としての聖霊を受けているものなのか、この2種類しかありません。これが基本の評価であり、根本的な人間に対する評価です。嘘をついていいのか悪いのかというのは、この評価から始めなければいけません。イエス・キリストを受け入れてもいないのに全く嘘をつかないもの、神様に興味まったくないもの、そういう人を良い人間と評価することはありません。だから、嘘をついても良いと言うことではありません。私たちは神様がともにおられるので、嘘をついてまで、人に迷惑をかけて、詐欺をしてまで自分の何かを取ろうとする必要がまったくありません。むしろその人が闇の中にとらわれているから、その人をイエスの御名によって生かさないといけないので嘘をつかないだけであって、嘘をつかないことが義であるから嘘をつかないわけではありません。よく覚えていてください。神様の評価は、今まで私たちが当たり前だと思っていた評価とは全く違います。どこの評価に立つつもりなのでしょうか。極端に申し上げると、世の中で良い人間と評価されるその評価に値するものは、その良い評価のゆえに、逆に闇の中から光に来ようとしないのです。

この間、両手、両足がない人間が、ものすごく険しい山を登って頂上まで行ったという感動的なニュースが流れました。神様は、それをご覧になると感動されるのでしょうか。クリスチャンの皆さんは感動されるでしょう。人間ではなくて動物の何かを見ても感動するのではないでしょうか。神様は涙を流されるのです。両手、両足がなくなったのは、人生の絶望によってまことの神様に立ち帰るための神様のあい女医なのに、山を征服することによって自分を支えて神様に行く道を絶ってしまいました。それが人間なのです。何を評価するのでしょうか。絶望的な人間の状態、罪が何かを本当に分かれば、人への評価はそんなにたやすいものではありません。イエス・キリストだけが、信じることだけが人への評価です。これが神様の評価です。イエス・キリストを信じて受け入れたものは、今までの評価の基準から見たときには、ものすごくだめな人間でも一切そのような事は構わずに、お前は合格なのだ、お前は義なのだ、お前はわたしの子どうおなのだ、お前は永遠のいのちを持っている、お前は世の光なのだと評価して宣言されます。

ですから、結論として、イエス・キリストを信じている信者、クリスチャンの自己評価を改めなければいけません。今申し上げましたように、今までの評価の基準は一切構わずに、イエス・キリストを信じるか信じないか、その信仰だけを基準にして、自分は義、つまり、きれいにきよめられたものなので、死と罪の原理から解放されて自由なのだ、神様から合格のサインがおりた存在なのだという自己評価が必要なのです。そして、イエス・キリストを信じることによって、自分は他の評価がどうであれ一切かまいなく、私は幸いなもの、幸せなものだということだけではなくて、私はこの暗やみの世の中に光として必ずなくてはならない必要な存在なのだ、価値あるものなのだというのがクリスチャンの自己評価です。なかなかそこに実感がないし、なかなかそこにたどり着けないでしょう。それは今まで、神様の評価ではない別の評価の基準がまだまだ残っていて、それに振り回されているからなのです。あてにしないようにしましょう。それはこれから伝道するためにいろいろな人と付き合って一緒に歩かなければいけないので、そういう意味でこれから参考にしないといけないものであって基準にはなりません。自信を持ってください。自分を再評価して喜んでください。皆さんは唯一、世に必要なこの世の希望の存在です。

そして、最後にひとつ、世のための福音宣教、光を照らすことが十分にできる存在です。皆さんの何かと関係なく、聖霊が皆さんに宿っていて、イエス様がおっしゃいました。あなたがたは、私がやることと、それ以上のこともこれからできるのだと。精精霊が望まれると力を得て、エルサレムから地の果てにまで私の証人となる。それが皆さんです。あるかないか、優劣など関係なく、状況など関係なく、外見などと一切関係なく、皆さんはきれいな方であり、幸せな存在であり、必要な方であり、できる方なのです。この自己評価を邪魔するものは、すべて悪魔のささやきだと思えば正解です。それがどんな事実であれ、どんな事に基づいたことであれ、神様の評価とは程遠い関係ない悪魔の偽り、詐欺なのです。騙されないようにしましょう。心の中にしっかりと刻んでおきましょう。だから、これから世界中、地球が終わる時まで一緒です。肌色がどうであれ、実力がどうであれ、優しいかどうかということの以前に、イエス様を信じて幸いなもの、いのちあるものと、これからイエス様を信じなければいけない不幸な存在、死にとらわれているもの、この2種類の人間しかありません。これが神様が人を見たときの評価です。だから、まずはあまりにもデリケートで細くならないようにしましょう。基本、根本的な人間の評価からスタートして、その上で細かい事にアプローチしするようにしましょう。その順番が逆になると大変なことになります。

(祈り）

恵み深い天の父なる神様。神様の恵み、憐れみによって滅びるしかない私たちが、イエス・キリストを信じることができ、暗やみの人生が終わり、光の人生を歩くこの幸いを感謝いたします。しかし、この世の基準、今までの人に対しての評価の基準等に惑わされ、振り回されて、この祝福を存分に味わうことを邪魔される時が多くあります。今日のメッセージを通して、神様の評価にしっかり立って、人を二分して評価するところからスタートすることができるようにしてください。そして、クリスチャンが自己評価を改めて、本当に心から感謝して主をほめたたえることができるように、ひとりひとりをあわれんでください。。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。